

説教 『獄につながれない言葉』山本 護 牧師
聖書 詩編 116:8~11/テモテへの手紙二 2:8~13

「この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれている。しかし、神の言葉はつながれていない(Ⅱテモテ 2:9)」。福音のために獄につながれる。戦前の日本もそうであって、遠い昔の話ではない。また福音を担う自負や倫理観から、自ら獄に陥ってしまう信仰者も少なくない。世に獄がつくられ、また自分自身でも律法的な獄をつくってそこに囚われる。しかしどんな獄をもってしても、「神の言葉はつながれない」。風が吹き抜けるように、御言葉は自在に広がっていく。

人間は獄につながれる。「しかし、神の言葉はつながれていない」。この言葉を深く胸に刻みたい。台風が去った風の強い朝、伝道所の庭を逍遥していると、そのことをうっすら実感した。人間は弱い。弱いがゆえに頑なだ。だが福音の言葉はねばり強く、しなやかで、予測を裏切って自由に吹き抜ける。

「次の言葉は真実である(2:11)」として簡潔な証言がそれに続く。「わたしはキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる(2:11)」。ロマ書の響きを受け継ぎ(6:4)、キリストとの結合を語る。ただ一度、十字架で死んだ「神」の真実が私自身に起こる。キリスト者とは何か。受洗し(6:4)、世俗価値の獄から解放され、「キリストと共に生きるようになる(Ⅱテモテ 2:11)」者のことだ。

「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる(2:13)」。自分の不誠実を諦めているわけではない。誠実であろうとしても、世の獄、自らの獄に囚われて自分が歪められてしまう。そのことを隠さずに表明しているのだ。パウロは「わたしは自分の望む善はおこなわず、望まない悪をおこなっている(Ⅰコリ 7:19)」と語った。たとえ不誠実に陥っても、私たちの希望は「常に真実であられる」キリストにある。言い換えれば、「人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方である(3:4)」。人間は自らの限界に囚われて不誠実に陥るが、キリストの真実が私たちを贖って下さる。あのただ一度の十字架によって、「わたしたち(の不誠実)はキリストと共に死んだ(Ⅱテモテ 2:11)」のだから。

それでは不誠実な私はどうすればいいのか。何ができるのか。「わたしは自分のしていることが分からない。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする(Ⅰコリ 7:15)」。なるほど、彼らはその身を飾らず、隠さずに言い表している。「わたしたちが誠実でなくても(Ⅱテモテ 2:13)」と言う通りだ。私たちも自分を隠さず、そのまま神の御前に立ちたい。そもそも誠実なふりで神を欺くなど出来るわけがなかろう。率直に、偽りなく、半ば癖になっている謙遜をやめ、「私を私とする姿」で立つ。とはいっても、偽りと真実の境目は自分でも分かりづらい。それならば、分からぬまま立てばよい。

「わたしは信じる。〔激しい苦しみに襲われている〕と言うときも、不安がつのも、人は必ず欺く、と思うときも(詩編 116:10~11)」。苦難や人間不信に遭っても詩人は奥底で信じ、「命あるものの地にある限り、わたしは主の御前に歩み続けよう(116:9)」と決意する。なんと自然で、なんとという信頼か。助け出された経験(116:8)が詩人を支えている。この事は私たちとて違わない。風のように自在に働かれる神の言葉が、獄にあった私たちを(Ⅱテモテ 2:9)どれほど助けくれたかを、慎重に思い出してみよ。



【おまけのひとこと】

私の不誠実でもキリストは真実 それはそうなのだが 馴染んだ不誠実に安住してもらえない
私は真実な方と共に死に 共に生きているのだから 永遠に馴染まない領域を進んでいるのだから